

節の融合の形式と特徴について

— That's X is Y 形の談話上の働き —

澤 田 茂 保

0 はじめに

日本人英語学習者が学校で学ぶ文法はちゃんと書かれた英語を読んで理解するための文法で *written language* の文法である。このような文法が正統であった理由は、学習目標がちゃんと書かれたものを読む力の養成にあったことと、もう一つは、「書かれた言葉はしっかりと残って」おり、客観的な分析対象にしやすいという方法論上の理由もあっただろう。話される言葉 (*spoken language*/ SL) は流れる水の如くで後に残らず、また、何らかの方法で視覚情報に転写して記録に残しても、構造は捉えがたく、無秩序な印象があり、「文法」といったような有意義な法則性などない、と思われたからである。しかし、録音の技術やコンピュータによるコーパス分析が日々進化しているので、以前とは異なって SL を客観的に観察することが比較的容易になっている。今後は SL を分析の対象とすることで、*written language* の文法がとらえていなかった現象の存在が明らかになっていき、また、それが SL の文法の構築につながるものと思う。

本稿では、*written language* に基づいた文法論では許されざる形式が *spoken language* では繰り返し出現していることをみて、とくに「節の融合」と呼ばれる現象について焦点を絞って考察したい。第1節では、節の融合について先行文献の取り扱いを概観し、その中で *That's X is Y* と模式的に表示できる形式があることを見る。第2節では、インタビュー・データにおける実例で、この形式の統語上の特徴と分布を見る。第3節では、この節の融合形式がどのような理由・条件で出現するのかについて考察する。

1 「節の融合」について

本稿のタイトルに「融合」という語を使った。言語学には blend/ blending という現象があり、それには従来「混交」や「混成」という訳語を当てていた。本節では、blend/ blending について、伝統的な文法論での取り扱いと使用モードの違いを念頭においた今世紀の文法論での議論を概観する。

1.1 これまでの blending について

混交 (blending) と言えば、まずは語彙の分野で、brunch や smog のように二つの語を合わせる新造語形成のプロセスを指す。blend という語は二つの異なったものが単純に混ざるといふより、混ざることによって「よいものができる」といった含意がある。既存の語彙を利用して今までにない新しい概念を作る創造的な現象なのでこの名称が与えられた。現代社会は新概念の創出にあふれており、既存語彙を統語的に並べても言い表されない語感というものがある。そういった気持ちを契機に、語彙面の blending はあらゆる使用域・使用分野で観察される。例えば、地理学の Eurasia が blending による語形成であることを意識することはほとんどないであろう。この意味で、blending を「混交」と訳すのは不適切ではないかと思う。

他方で、語彙面ばかりではなく統語面でも blending の現象があると指摘されてきた。例えば、MEG (VII p. 386) には、than を different や other と一緒に使う例や、Hardly...when と No sooner ...than を混用して、Hardly ...than としてしまう例などが記述されている¹。また、高校では、ほぼ同じ意味である “can’t help doing...” と “cannot but do...” を別に教えるが、この二つが “cannot help do...” のような形で使われることがある。これは統語面の blending としてよく指摘される事例である。統語面での blending は、いまでは間違いとは言えない段階にあるものがあるが、やはり一時的な事象と理解されており、明らかに「混交」と名付けてもよいものがある。これらは、語彙面のような創造的なプロセスではなく、誤解や誤用に基因しているので、blending とはいえず、単なる confusion とでも名付けるべき現象であろう。

他方で、統語論では、blending とは別に “anacolutha” と呼ばれる現象があり、これには「破格構文」という訳語を当ててきた。事典を調べて見ると、anacolutha を否定的にとらえる傾向があるようだ。例えば、「言語運用上の現象で、文構造が錯綜し、文の整合性が失われる現象」（『現代英文法辞典（1992 年版）』）とか「ある文の文法的な構成が、途中で言い直したり、冒頭部を忘れたために混乱し、その呼応関係が破れる現象」（『新英語学事典（1982 年版）』）といった解説がある。前者では、Quirk(1955)からの事例引用でリアルタイムでの発話例、MEG が “exhausted relative clause” と称している例及び上に述べた blending の事例をあげているが、きわめて否定的な扱いをしている。また、言語運用上の現象と指摘しているものの、spoken language の特徴であるというとなえ方をしていない。一方、後者の事典では、「十分に推敲をする余裕がある場合は破格構文はほとんど起こらないが、自然談話の中では、文の途中で考えが変わったり、思考の流れが途切れたり、注意がそらされたりするために、破格構文は避けることができないものである」という記述がある。そして、再述的なもの、exhausted relative clause 及び途中の言い換えの事例を挙げている。anacolutha を単なる誤用と切り捨ててはいないが、こういう混交が起こる原因を言語処理上の問題として考察する方向性はなく、まして、よいものが生まれているという認識はない。

伝統文法を離れて、生成文法的な立場で、統語面で blend という用語を最初に使ったのは Bolinger(1961)であると思う。当時は二つの節を「変形規則」によって結びつける生成過程が理論として許容されており、生成文法をその後の理論発展の段階から学んだ人には、当時の Bolinger の論考の意図が那边にあるのかといふかられるであろう。Bolinger は二つの節構造を含んだ文法的に確立している構造は、基底で独立した節がくつついたものであるとし、syntactic blends と称している。現在の生成文法では意味が失われた立場である。

以上は、語彙面であろうと統語面であろうと、書かれたことばについて観察されたことが主である。その議論には written/spoken といった使用モードへの気づきは希薄である。本稿で blending/blend と呼びたいのは、リアルタイムの発話である種の語用論的な機能を担っていたり、あるいは情報処理上の必然による統語的変容とも言うべき言語現象である。次節ではそのような観点での blend

について述べる²。

1.2 統語面の blending について

本節では、統語面の blend/blending を SL の特徴として認識している今世紀になつての研究である Biber et al. 2000 (以下 B&A) と Carter and McCarthy 2006 (以下 C&M) を取り上げる。

B&A は約 4 千万語のコーパスを分析対象として、書かれた英語と話された英語についてその相違と類似を定量的に分析したもので、コーパスによる初めての包括的な研究と言える。英語について四つの使用域(会話、ジャーナリズム、小説及び学術文)を設定して、それぞれの使用域の英語について従来の文法的な項目に応じて調査している。新しい試みとして会話を使用域の一つとしてあげているためか、the grammar of conversation という特別の章を設けて SL の構造的な特徴について記述している。その章の中で、syntactic blends を「運用上の現象」として扱って、それに dysfluency and error のサブタイトルがつけてある。

B&A の syntactic blends の位置づけを知るために表にしてみる。いいよども・ポーズ、繰り返し、言い直し、不完全発話はいずれも発話の構造的性を不透明にし、無秩序性を高めてしまう言語現象である。B&A が節の融合をこのような言語現象と同列に位置付けていることは、B&A では節の融合が好ましいものと認識されていないことを示している。B&A は節の融合を起こしている構造を “A sentence or clause which finishes up in a way that is syntactically inconsistent with the way it began. The speaker ‘switches horses in mid-stream,’ so to speak.” (B&A : p. 1064) と述べているが、始まりと統語的に一致しな

運用上の現象(performance phenomena)	
いいよども・ポーズ(hesitations/ pauses)	
繰り返し(repeats)	
言い直し(reformulations)	
不完全発話(incomplete utterances)	Self-repair
	Interruptions
	Repair by another interlocutor
	Abandonment
節の融合(syntactic blends)	

い形で終了している文や節はたくさんあるし、また理論的にはそのパターンは無限である。この記述では、ある意味で、言い直しもその中に入るであろう。

B&A の節の融合の事例を見てみよう。B&A (pp.1064) で、節の融合は完全に運用上の誤りと見なせる例と完全には運用上の誤りとは見なせない例とに分けて記述している。(1)は前者であり、(2)は後者である。

- (1) a. About a hundred, two hundred years ago, we had ninety-five percent of people, i... in this country, were employed in farming.
- b. In fact, that's one of the things that there is a shortage of in this play is people who actually care, er...er.. about what happens to um.. each, each other.
- (2) a. So if you were...in receipt of income support then you don't have to pay very much.
- b. The smallest room they have is for twenty-five to thirty people which I mean even that may be too big for what we want.
- c. You're talking about a week and a half or something, aren't we?

(1)では、二つの本動詞が含まれており、英語の文法では許されない形である。一方、(2)は、一般には書き言葉では許されないが、話し言葉の自由度の一つ、という³。

次に C&M を見てみる。C&M は、“clausal blend” という用語で節の融合を取り上げて、“A (clausal) blend is a syntactic structure which is completed in a different way from the way it begins.” (C&M: p.171) と説明している。B&A と異なって、事例はわずかに次の 2 例を上げているだけである。

- (3) a. In fact, that's why last year they rented a nice house, in ...er... Spain, was it, is that it was near airport.
- b. They've nearly finished all the building work, hasn't it?

(3a)は、(1b)にあたり、(3b)は(2c)に当たる。B&A の(1a)、(2a)、(2b)については

C&M には言及がない。本稿では(1b)、(3a)について考察するが、他のものについて、ここで簡単に触れておきたい。まず、実際の音声がないので断定はできないが、(1a)の形式は、*we have* が次の名詞句の談話導入マーカーのような働きをしていると見なせる。実のところ、数は多くないが SL では、*We have* の後に関係節ではない節構造が現れることがある。(2a)は、条件文での前件と後件の動詞形の不一致であるが、B&A も指摘しているとおり、これは果たして *dysfluency* や *error* と見なせるか疑問である。前件が仮定法過去だが、主節部は開放条件となっているが、これは途中で事態認識が変化したからである。推敲によって前件と後件を一致させることは多いが、リアルタイムの発話では動詞の語形が一致しないことはよくあるので、条件文の前件と後件とは認識的に独立しているのであろう。他方、(2b)は B&A では *resumptive pronoun* の例であるとしているが、音調によっては、*reformulation* に分類すべきかもしれない。ただし、生成文法で言う *resumptive pronoun* を含む構造は節の融合とは言えない。

以上、節の融合の先行する研究を概観したが、そこでの基本的な態度は、節の融合は不規則なもの、本来はあってはならないもの、といったとらえ方である。とくに B&A にはそれは明らかであるし、C&M では特に関心がないか、態度を留保している、といった印象を受ける。B&A と C&M が共通して記載している形式は、(3a)と(1b)である *That is [...X...] is that [...Y...]* と模式化できる形式と、(2c)と(3b)の付加疑問文のタグ部分の不一致形である。次節では、とくに前者について詳しく見ていきたい。

2 That's X is Y 形について

B&A と C&M が共通して節の融合として記載している事例は、模式的に *That is* [_{NP} ...X...] *is that* [_{NP/S} ...Y...] と表せる。本節では、この形式を便宜的に *That's X is Y* 形と名付けて考察する。

2.1 That's X is Y の形式的な特徴

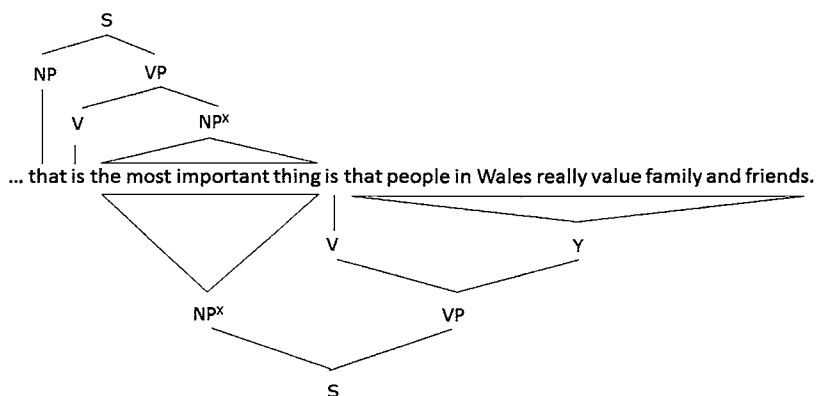
(4)は、英国人歌手 Katherine Jenkins のインタビューからの抜粋で、出身地

Wales のことを聞かれて答えているところである⁴。

- (4) Oh, well, I would love them to go and visit the country because I'm very, very proud of being Welsh. Um, you know, it's a country that's part of Great Britain, but it is still its own country in that we have our own language, and we have our own assembly, our own government. And, um, it's just a very beautiful country. Lots of mountains, lots of green. Um, sheep is like, sort of, like the animals which are everywhere. And, um, also a really lovely coast line, so many beautiful beaches. But the people there are very friendly, and I think that's the most important thing is that people in Wales, they really value family and friends, and so there's a real sense of community.

(4)には、you know や sort of、like といった表現が挿入的に頻出しており、また there's や We have のような機能部分を欠く状況省略などがある。これらはリアルタイムで進行する発話の構造的な特徴である。いまそういった特徴を除外して、下線の部分を見てみよう。(4)の下線部には、(5)のような句構造が認められるであろう⁵。

(5)



つまり、下線部分は、前から見れば、(a)の節の構造が満たされており、後ろから見れば、(b)で節の構造が完了しているのである。

- (6) a. That's [NP the most important thing].
 b. [NP The most important thing] is that people in Wales really value family and friends.

(6a)と(6b)は共に文法的な節構造である。しかし、二つが融合した(5)はふつうの文法では認められない構造である。本稿の問題意識は、(5)のような形式が、偶然的の言い間違いなのか、それとも何か理由があるのか、ということである。

母語話者にこの形式の判断を仰ぐと、これはおかしい、という判断の下に、that'sではなく、thatではないか、といった反応が返ってくる。しかし、実際の音声では話者は明らかに that's と発話している。実のところ、母語話者の判断はすでに規範的な文法のモニターの影響を受けており、母語話者の文法判断であってもしばしば発話の実態を捉えてはいない。とくに準備もなく話しながら考えているような発話の場合、規範的な文法ではとらえきれない構造的な変化が現出しており、その一つの例が That's X is Y 形なのである。現実として発生している以上、間違いと切り捨てるのではなく、その存在を認めた上で、このような形式が発生するのはどのような環境なのか、ということを次節で見てみる。

2.2 事例について

奇しくも B&A と C&M が共に事例として記載しているように、この that's X is Y 形は偶然の間違いの産物でも孤立した現象でもない。実は、リアルタイムで進行する発話であって、かつある一定の環境が整ったときにしばしば出現する形式である。この節では、リアルタイムの発話である「インタビュー」をデータとして、この形式の分布の状況を見みる⁶。

SL のデータは音声がないと発話のイメージがつかめず、転写した文字では構造がわかりにくいことがあるので、事例を模式的な形式と一緒にあげる。

- (7) [that's [NP...THING...] is that [...]]⁷

.... So, you know, I think that's one thing that a young art student could look at in their life is that there's many possibilities and you might not end up exactly where you think you're going to go,

- (8) [that's [NP...THING...] is [...]]⁸

... and I think that that's something that people don't realize about her is there's such a softness to her,....

- (9) [that's [NP...THING...] is [NP/～ing]]⁹

...that's the only thing that I still enjoy about acting now is the process, is making the movie, is showing up every day and working with the crew and....

- (10) [that's [NP...THING...] is [NP]]¹⁰

... I think, uh, that's one of the things that's been very important in a writer who's as important as Shiga Naoya is the simplicity of his style, the cleanness of it.

- (11) [that's [NP...NP...] is [to be ...]]¹¹

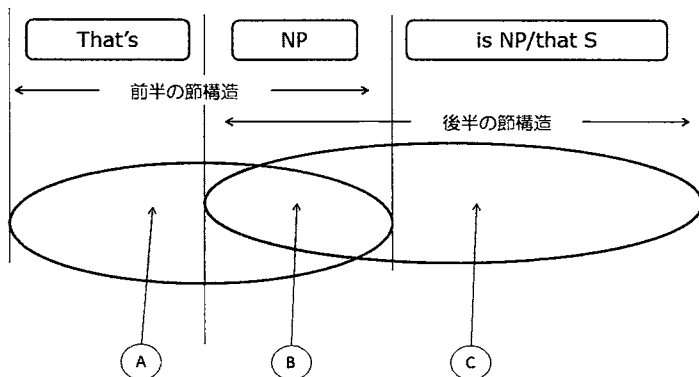
... and I think that in, that's exactly the dynamic that transfers, for my character, is to be with a man who hasn't tried every line,

- (12) [That is [NP...ASPECT...] is that [...]]¹²

That is one of the most misunderstood aspects of my paintings is that they're not about the characters.

これらはすべて、that's/ that is の補部の名詞句が、後半の be 動詞の主語になっている。模式的に表せば、(13)のようになる。

(13)



A に *that's* という特定の語連鎖が来て、B に何らかの名詞句表現が来て、C に *be* 動詞と名詞句あるいは *that* 節が来ている。また、多くの例が *I think* の直後に現れていることが観察される。

B&A や C&M が *syntactic blends* や *clausal blends* と称している現象が、単純にある構造を共通部分として前半の節構造と後半の節構造がつながっているだけならば、理論的にはあらゆる形が期待されるはずである。例えば、(14a)と(14b)のように共通する表現があれば、いつでも融合してもおかしくはないであろう。

(14) a. John picked her the flower.

b. The flower was classified into endangered species.

c. John picked her the flower was classified into endangered species.

しかし、*the flower* を共通部分として、(14a)と(14b)が(14c)のようになることは、かりにリアルタイムの発話であってもありえない。このようなタイプの融合の事例は皆無である。

実のところ、節は自由に融合するわけではなく、一定の制約条件の下で起こるに過ぎない。それ故に、B&A も C&M も限られたタイプしか挙げることがで

きなかったのだと思う。もしそうならば、どうして特定の形式が繰り返して現れるのか、ということに説明が必要であろう。次節では、That's X is Y 形が発生する共通した環境を見てみたい。

3 That's X is Y 形について

本節では、That's X is Y 形がどのような文脈で出現しているかについて詳しく観察する。

3.1 That's X is Y 形の出現環境

少し長くなるが、前節の(7)の先行の文脈を(15)にあげる。(15)は、ゲーム・キャラクターのデザイナーRodney Greenblat が、キャラクター・デザイナーを目指す高校生にアドバイスをお願いします、と問われて答えるところである。

(15) Wow, well, I guess I would say there's many different occupations within the idea of being an artist and you can bounce back and forth between them. It's not like you have to choose your exact speciality and go with it. You can try one speciality for a while and you can skip to another, especially when you're young like a high school student or even in college. You don't have to specialize right away, but it's a good idea to try the different specialities and sort of test the field until you find out where it is you fit in. I think it's really easy when you get to university to say, "Hey! I'm this kind of artist!" or "Hey! I'm going to do this thing when I get out of college." But all the things I thought I was going to do until I, I was in college, I'm doing totally different things. You know, they aren't the same things and the reason is I let the direction happen. I let people pull me towards things that were good, that I could do and also were comfortable. So, you know, I think *that's one thing that a young art student could look at in their life is that there's many possibilities and you might not end up exactly where you think you're going to go,*

高校生へのアドバイスと言われて、まず話し手は Wow と口にして驚く。そして、アーティストへの道は一直線ではなく、様々な紆余曲折がある、と頭に思い浮かんだので、それを言語化し、その後一直線ではないという点について縷々敷衍していく。紆余曲折の道は決して悪いことではなく、いろいろなことを試している時期だ、自分もいろいろなことをしてきた、と述べていくが、その次に、自分がいろいろなことをしてきたのは、そういうふうにならなってきた、といった紆余曲折の話とは若干ずれる話へと移行している。that's X is Y 形の直前の使用環境では、that で指示されるべき内容は曖昧になっていることが分かる。話し手側では「自分になりたいと思っても紆余曲折があるんだよ」という内容を指しているのだが、聞き手には「進路を自分の方から積極的に仕向けるようにしてきた」といったことと誤解される可能性もある文脈である。so 以下で高校生へのアドバイスをまとめようとして、that を使うのだが、それが何を指しているか曖昧になったと感じたので後続の Y 部で再述していると言える。つまり、本来は that's X で終わるべきなのだが、文脈環境上で that の指示対象が曖昧になっている、少なくとも話し手はそう感じている、その意識が明確化のため Y 部で指示の内容を言語化しているのである。従って、that の指示対象が曖昧にならざるを得ない文脈環境がないと、このような構造変容は起こらないし、容認もされない。それ故、文脈もなく that's X is Y 形の例文を作って、その文法性について母語話者の判断を仰いでも、否定的な反応しか返ってこないのである。

もう一つ、(8)の先行の文脈を見てみよう。(8)は、女優 Nicole Kidman がリメイク映画『奥様は魔女 (Bewitched)』の Nora Ephron 監督について語っているところで、先行する文脈は(16)である。

- (16) And I think, to bring it to a broader level, I mean, Nora is incredibly witty and powerful as a woman, yet she's also extremely sort of nurturing. And she invites you over on a Saturday night, and she does all the cooking, and she kind of has 30 people over, and she loves to direct the film during the week and then entertain on the weekends, ... and I think that that's something that people don't

realize about her is there's such a softness to her, and, and at the same time, she's one of the smartest writers and smartest women working today....

ここでもよく似た文脈が読み取れるであろう。(16)では、監督 Nora を広い観点から評価しようとして、witty で powerful な女だが、世話好きであると頭に思い浮かび、その具体例として、映画を撮影しながら、週末には大勢の仲間を呼んで料理を振る舞って人を楽しませている、と続いている。That's X is Y 形の出現する直前においては、文脈環境上で「男性と同じように仕事をこなす」とことと「女性的な優しさを人に対して示す」ということが同時に存在している。話し手は、後者について X であると判断するが、聞き手には that の指示対象が前者でもありうるという意識があるので、Y 部で再述している。

このように、That's X is Y 形の出現文脈には共通するパターンがある。それは、直前までの文脈環境で、that の指示対象の内容が話し手の心理で二義的である、という意識が存在している場合である。このような文脈上の曖昧性が発生するためにはある程度の長さの語り部分がないと成立しないので、that's X is Y は単独の例文として扱うことは不可能である。あくまでも、談話の流れで発生する指示対象の二義的状況がなければならない。That's X is Y 形は、that の二義的状況を回復するために、一つの談話上の手段として発生すると言えるだろう。

(7)も(8)も、That's X is Y 形での that の指示対象は、話し手の口から出たことばでの二義性であるが、話し手と聞き手のインタラクションの中で発生する指示対象の二義性もある。例えば、(12)は、スヌーピーのキャラクターで芸術活動をする Tom Everhart が、作品について語るところであるが、(17)のように、that はインタビューアーが事前に述べたことを指している。

(17) A: From looking at your artwork, it seems like what you experience becomes what your paintings are.

B: You make a very good point. That is one of the most misunderstood aspects of my paintings is that they're not about the characters. My

paintings are about this relationship that we've been talking about that I had with Mr. Schultz.

ここでは長い語り部分がないので that には二義性はないのではないと思われるかも知れない。ここでは二人のインタラクションの中での that の指示なので、Y 部は B 側からの A の指示対象の確認、といった働きがある。A の言った what you experience becomes what your paintings are は具体的に何を意味しているか多様な解釈があり得る。しかし、B はその中に自分が最も言いたかった「自分はキャラクターをただまねているのではない」という一つの解釈を読みとって、それを A と確認したかったのである。

(4)に立ち戻って、that's X is Y の出現の文脈を見てみよう。(4)は、話し手は出身地 Wales について語ってほしいといわれて、話しながら考えている状況である。ウエールズと英国の関係やウエールズの土地や自然の風景について話しているうちに、ウエールズの人々のことにことばが及ぶ。That's X is Y 形の出現の文脈で、Wales の人以外のことと人のことが、A but B のように対比されて談話に存在している。従って、話し手は that といったときに、曖昧であるという意識が働いたので、人のことであることを Y 部で再述しているのである。

3.2 That's X is Y の変異形

That's X is Y 形には変異形とも見なせる形式もある。(18)は、指示詞が that ではなく、this である。また、Y 部が because 節になっている。(18)は、Wikipedia の創業者 Jimmy Wales が運営の仕方について語っているところである¹³。

(18) But it's also quite important that people meet in person, and we actually have a lot of in-person meetings, um, with the core community. **This is** the one of the reasons why I traveled all over the world so much **is because**, not because I can do anything all that useful myself, but sometimes people, you know, on the Web site, they'll say, for many months, people will say, "Oh well, we should get together sometime. We should have a group meeting and have some beer and

hang out,” but then well, it never gets scheduled exactly. But then if I’m coming, then that’ll be a good point for a meeting to happen.....

これは X 部に reason という語が来ているので、Y 部に because が現れている。また、Y 部の冒頭で reformulations が起こっているため流れが若干複雑になっている。This は直前に自分の言ったことを指している。Y 部では、this で指し示す内容のがすんなりと再述されていない。because 以降に現れるはずの内容は、ここでは一番最後に (if I’m coming, then that’ll be a good point for a meeting to happen) 現れている。こういう流れになった原因は、「日頃から忙しいと言って、人が会わない傾向にある」及び「訪問者によって人が実際に集まる機会を生む」といった事情を何らかの形で挿入しないと、「人は会って話をするのが大切」⇒「自分が世界中を実地で回っている」とすぐには結びつかないという意識が働いたためであろう。リアルタイムの発話なので、全体の流れにさらに挿入部があり、書き言葉のように整理はされていないが、思考の流れには That’s X is Y 形の環境である。

また、指示詞が that/this ではなく、it の事例もある。この場合は、言語表現そのものと照応関係を持つ。(19)は、モンゴメリの小説『赤毛のアン (Anne of Green Gables)』の舞台である Prince Edward Island 島の観光使節が、原作の登場人物である Marilla と Lynde がよく料理をすることから、インタビュアーにあなたはどうか、と聞かれて答えるところである¹⁴。

(19) I do some cooking. I certainly don’t do as much as they did, but I do enjoy it.

It’s certainly something that I get a lot of joy out of **is** cooking, certainly.

指示代名詞 that/this は言語外の世界の指示物を直接的に指示する働きがあるが、ここの人称代名詞の it はむしろ言語内で指示している。つまり、(17)では、it と照応する表現 cooking が先行する文脈にある。そして、それがそのまま Y 部で繰り返されている。

同様に、(20)では、日本育ちの映像翻訳家の Linda Hoaglund が、インタビュ

アーに What was it like growing up in Japan? と聞かれて、答えるところである¹⁵。

- (20) Um, well it wasn't easy, you know, partly because our parents sent us to Japanese schools. They made a decision which I'm very grateful for because it's really, well it's not the only way, but it's really the ideal way to gain natural fluency in Japanese is to just grow up with it, not just grow up with it around you, but to grow up being educated in it.

冒頭の it はインタビュアーの質問中にある “growing up in Japan” を指している。しかし、下線の it は親が日本の学校に通わせたことを指している。It's X is Y の変異形では、人称代名詞 it は先行するコンテキストに存在する言語表現と照応関係にあり、指示代名詞 that のように言語外の思考内容の場合と異なっている。

3.3 That's X is Y の出現の頻度

前節の事例は筆者が過去のインタビュー・データで記録にとどめておいたものである。That's X is Y 形は、決して偶然の間違いでも、孤立した現象でもなく、一定の語用論的環境に於いて発生しうる形式であることが明らかになったと思う。では、このような形式が実際どれくらいの頻度で発生しているのか、という疑問が生じるだろう。過去のインタビュー・データのすべてを精査することは不可能なので、EJ の 11 ヶ月分、インタビュー数 15 でサンプル調査してみた。その結果、以下の事例があった。

- (21) a. ... And I think we're, that's one of the fastest, uh, things that we're beginning to lose, is this old view of the world that there are a handful of thoughtful, intelligent people who should be broadcasting their views to everyone and that the public is some kind of crazed rabble, easily swayed by popular, sort of, rhetoric and so forth.¹⁷
- b. ... That's the thing for me is that it couldn't just have been, like, a great part with some really big acting challenges.¹⁸

- c. ... And so that's what I did, and that's the performance that, well, you'll see in the movie is, um, is a live one.¹⁹
- d. ... So that's the secret to directing, I think, is working with really good people.²⁰
- e. ... Um, no, it was working with Ryan was just a delight.²¹

(21a)の *that* はインタビュアーが先行文脈で聞いたこと、主流メディアが一般大衆の知的レベルを過小評価している、ことを指している。この内容が Y 部で別の表現で再述されている。(21b)は、Daniel Radcliff がハリー・ポッターシリーズ終了後に映画『The Woman in Black』に主演したことについて述べているところで、*that's* は先行文脈のその映画での役柄の良さではなく、ストーリーが素晴らしいことを指していて、Y では同様の内容を別のことばで再述している。(21c)は、女優 Michelle Williams が映画『The Baxter』のことを語る場所である。二つの *that* は、歌うシーンの撮影の時にクチパクで歌うのはしっくりこなかったもので、その場で「生で歌った」ということを指す。(21e)は変異形で、かつ全体が過去形の文である珍しい例である。ただ、*that was* という形式はないが、それは偶然なのか分らない。

インタビュー数 15 に対して 5 つの事例であるが、この頻度をどう評価するかは難しい。だが、偶発的に発生した間違いの構造とは言えないことは確かであろう。

4 まとめ

本稿では、節の融合の一つである *that's X is Y* 形について、それが偶発的な誤りではなく、一定の談話状況で出現する形式で、ある種の談話調整の機能を持っていることをみた。*that* の指示対象の内容において二義性が発生している文脈環境があり、その二義的な指示をリアルタイムで解消するために通常の文法では許されない構造変容が発生しているといえる。指示物の明確化という機能のために、この形式では *be* 動詞が使用されており、逆に言えば、*be* 動詞以外の

形式で融合することはない、とも言えるのである。

・本稿は日本英文学会中部支部第 62 回大会（平成 22 年 10 月 16 日、於金沢大学）で発表した内容の一部に加筆訂正したものである。また、本研究は科研費（課題番号 22520614）の助成を受けた研究の一部である。

References

- Biber, Douglas, Stig Johanson, Geoffrey leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Bolinger, David (1961) "Syntactic blends and other matters," *Language* 37-3, 366-381.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English*, Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- 澤田茂保 (2012) 「Spoken English の強調形式について」、『言語文化論叢』第 16 号, 63-86.

¹ 例えば、Hardly had I had time to recognize her than she was inside.は、No sooner had I had time to recognize her than she was inside.か、Hardly had I had time to cognize her when she was inside.とすべきである。

² blending は現象としての用語であり、その出現例は blend と表す。従って、後者は可算である。

³ B&A は、さらに次のような例も syntactic blends であるとしている。

(i) We have all these twentieth century ...uh...devices that we have eighteenth century people running them....

(ii) Uh, he's a closet yuppie is what he is.

(iii) You know who else is like that is Jan.

(i)は、Jespersen の exhausted relative clause である。(ii)は SL の強調形式の一つで、他には、次のような事例がある。

(iv) a. ... it's hand-blown glass is what it is. (The Man in the Bottle)

b. ... He is our own "Mr. Bevis" is who he is. (Mr. Bevis)

これらは [NP] is [X] is [wh-word PRO is]の形式を持っている。多くの場合は二つの節に分かれることが多い。(澤田(2012)を参照) また、(iii)は、音声がないので分からないが、おそらく単純な間違いではなく、何らかの機能が含まれているものと思う。

⁴ *English Journal* (以下 EJ) 2007 年 8 月号

⁵ 下線部には、さらにリアルタイムの発話の特徴である「左方転移 (left dislocation)」があるが、ここではそれを除いて考える。

⁶ データは EJ のインタビュー記事からとり、母語話者の発話で、unplanned speech が保証されていない講演などは除いた。

⁷ EJ 2002 年 10 月号

⁸ EJ 2005 年 10 月号

⁹ EJ 2002 年 10 月号

¹⁰ EJ 2007 年 6 月号

¹¹ EJ 2006 年 5 月号

¹² EJ 2005 年 9 月号

¹³ EJ 2007 年 8 月号

¹⁴ EJ 2006 年 2 月号

¹⁵ EJ 2008 年 5 月号

¹⁶ 調査は、EJの2012年1月号から2012年11月号までで、母語話者の unplanned speech と判断されるインタビューに限って行った。

¹⁷ EJ 2012 年 4 月号

¹⁸ EJ 2012 年 6 月号

¹⁹ EJ 2012 年 9 月号

²⁰ EJ 2012 年 11 月号

²¹ EJ 2012 年 11 月号